

組織行動研究

No. 22

編集後記にかえて

● 今年の文学部の入試で、日本史の問題に、占領軍の最高司令官の名前を書かせる箇所があった。

偶々、この採点に狩り出されていた小生にとって、これはまさにショッキングなデキゴトであった。

つまり、マッカーサーが日本に君臨していたのは、小生が学生時代のことであり、まさに昨日のこのハズであった。ソレが、大学入試の「歴史の問題」になるとは！ 小生も遂に歴史上の人物にナツカカ！ これでは、彼の退官の時のアノ セリフ通り「老兵ハ消エ去ルノミ……」だ。ソレが、丁度、定年の年とは話がうまくできすぎていると思ったものである。

とはいえ、戦後 46 年経ったのも事実である。本論の冒頭でも述べたように、この間の、日本の変

容はまさにオドロクベキモノがある。それが、この調査を思いついた理由の一つだったノダ。

● 理由の第 2 は「生命科学の飛躍的進歩」であり、それが、もたらしたさまざまな歪みである。

それらの問題の一つである「医事法がらみの諸問題」を検討するために '79 年に慶應大学内に「医療をめぐる法律問題研究会」が発足した。

この会でとりあげたテーマ、メンバーの専門領域が、これらの問題の複雑さを現わしている。ザットあげると、精神科、産婦人科、小児科、法医学関係の学者、勤務医、医療従事者、ライフ・サイエンス、民法・刑法の学者、判事、検事、弁護士、法務省・厚生省の担当官、文化人類学、心理学……等々であり、小生も、その末席で勉強させて頂いた。

詳細は省くが、簡単にいえば、本論文冒頭で述べた生命倫理に関する諸問題である。

これらの諸問題に対する「現代日本人の態度」も出来れば調査項目に加えておきたいと小生は考えた。併し、冒頭にあげた朝日新聞の世論調査の結果をみると、今回の調査が全国規模に近いものであり、高齢者まで含めた調査であることを考えると時機尚早とアキラメザルをえなかった。

併し、ひるがえって、今後、10 年、20 年先を考えると、是非入れ

るべきだ。たとえ、今回は時機尚早でも、先のことを考えれば敢えて入れようということになった。

かくして、「本調査用紙」の作成直前に「註つき」という邪道を押して、敢えて作成することにした。

それが、調査を始めて 1 年もたない中に、脳死臨調の答申がでる。日本医師会の生命倫理懇談会が尊厳死容認の報告書をだす、肝移植、体外授精、ホスピス……、次々と社会面をにぎわすデキゴトが起き、テレビで放映されるようになった。

これらの記事を見た時、初めの中は「シテヤツタリ！」とソノ見透しと決断にホクソエンダ。そして、次回の調査はもう「註」などつける必要はないなどと喜んでいった。併し、これらの問題が次々と踵を接して、紙面を賑わすのを見ると、4 年後の世の中を想像するのが恐ろしくなってきた。「先が思いやられる」とはこのことである。「先見の明」どころか「調査項目の抜本的見直し、再検討」ナンテコトになるのではないか、というのが現在の心境である。

● もう一つの理由は本文 I-1. で述べたモラルコード・コーホート・コンセンサスに関する話であるが、紙数がつきたので、この問題にまつわるエピソードは何時かの機会にゆずることにする。

榎田 仁

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究 (第22号)

責任編集 榎田 仁・南 隆男

KEIO STUDIES ON
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND
HUMAN PERFORMANCE No. 22
MARCH 1992

〒108 東京都港区三田 2-15-45
発行 慶應義塾大学産業研究所
電話 03-(3453)-5640 (直通)
<平成 4 年 3 月 28 日>

〒104 東京都新宿区高田馬場 3-8-8
印刷 株式会社 国際文献印刷社
電話 03-(3362)-9741 (代表)
<平成 4 年 3 月 21 日>